

ちくま文庫

薔薇物語 上

ギヨーム・ド・ロリス ジャン・ド・マン

篠田勝英 訳

筑摩書房



ちくま文庫

ばらものがたり
薔薇物語 上

二〇〇七年八月十日 第一刷発行

著者 ギヨーム・ド・ロリス

ジャン・ド・マン

訳者 篠田勝英 (しのだ・かつひで)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二―五―三 一―一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市北区櫛引町二―六〇四 一三三―一八五〇七
電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

©SHINODA Katsuhide 2007 Printed in Japan

ISBN978-4-480-42345-0 C0197

ちくま文庫

江苏工业学院图书馆
蔷薇物語 上

藏书章

ギヨーム・ド・ロリス ジャン・ド・マレ

篠田勝英 訳

筑摩書房

目次

凡例——8

『薔薇物語』前篇

I 〈悦楽〉の園——12

(小見出し下のカッコ内の数字はテキスト行数を示す)

夢と現実——わたしの夢(二) 五月の朝(四五) 壁の肖像(一二九) 〈憎悪〉と〈悪意〉
(二三九) 〈下賤〉(一五六) 〈貪婪〉(一六九) 〈強欲〉(一九五) 〈羨望〉(二三五) 〈悲
哀〉(二九二) 〈老い〉(三三九) 〈偽信心〉(四〇五) 〈貧困〉(四三九) 壁のなかの庭園
(四六一) 〈閑暇〉(四九五) 〈悦楽〉の園(五七三) 庭園のなかへ(六二九) カロールを
踊る人々(六九九) 〈歓喜〉(七二九) 〈礼節〉、〈悦楽〉と〈歓喜〉(七七五) 〈愛の神〉
(八六三) 〈優しい姿〉——二本の弓と十本の矢(九〇七) 〈美〉(九八五) 〈富〉(一〇一
七) 〈気前よさ〉(一二二五) 〈気高さ〉(二一八九) 〈礼節〉(二二三七) 〈閑暇〉(二二四
九) 〈若さ〉(二二五七)

II ナルシスの泉——〈愛の神〉の教え—— 69

庭園の奥へ（一二七七） ナルシスの泉（一三七三） 二顆の水晶（一五二一） 薔薇の蕾（二六一三） 矢を放つ〈愛の神〉（一六七九） 降伏——臣下の誓い（一八二九） 心の鍵（二九七五） 〈愛の神〉の掟（二〇四九） 第一の掟（二〇七四a） 第二の掟（二〇七五） 第三の掟（二〇八七） 第四の掟（二〇九七） 第五の掟（二一〇三） 第六の掟（二一一三） 第七の掟（二一二一） 第八の掟（二一六三） 第九の掟（二一九九） 第十の掟（二二二一） 愛の苦しみ（二二五三） 〈愛の神〉の贈物（二五八一）

III 薔薇の蕾をめぐって—— 126

〈歓待〉登場（二七六三） 〈拒絶〉登場（二九〇四） 〈理性〉の説得（二九五五） 〈友〉の忠告（三〇八三） 〈気高き〉と〈憐憫〉（三二三一） 〈歓待〉との再会（三三〇九） 〈ウエヌス〉の力（三三九一） 接吻（三四五五） 急展開（三四八一） 〈中傷〉（三四九三） 〈羞恥〉（三五四三） 〈嫉妬〉（三五八三） 〈羞恥〉と〈小心〉、〈拒絶〉を叱責（三六五一） 〈嫉妬〉の城（三七七九） 城の防備（三八四九） 塔のなかの〈歓待〉と〈老婆〉（三八九三） 恋する人の嘆き（三九四三）

『薔薇物語』後篇

IV

〈理性〉の勧告

180

恋する人の嘆き（承前）（四〇二九） 〈理性〉の教え（四一九二） 〈愛〉とは何か（四二六三） 〈わたし〉の反論（四三二九） 〈愛〉の定義——〈自然〉の奸計（四三四七） 〈若き〉と〈古い〉（四三九一） 愛・快樂・金錢（四五一五） 〈わたし〉の反問（四五九九） さまざまな愛（四六三三） 〈友情〉（四六五五） うわべだけの愛（四七三九） 〈運命〉について（四八〇七） 富と貧困（四九三一） 〈わたし〉の反論（五三四一） 〈愛〉と〈正義〉（五四〇五） アッピウスとウィルギニア（五五五九） 愛の放棄・憎しみ（五六九五） 「わたしを愛せよ」（五七六五） 〈運命〉の住処（五八九一） 〈運命〉の本性——ネロの例（六〇六三） 〈運命〉の恵み（六二二一） 運命に弄ばれる人々——ネロの例（六三四一） 運命に弄ばれる人々——クロイソスの例（六四五九） 運命に弄ばれる人々——シチリア王マンフレディの例（六六〇一） ホメロスの教え（六七四七） 「言葉と物」論争（六八七二）

V

〈友〉の忠告

303

〈友〉（七二〇二） 〈中傷〉（七三〇三） 〈老婆〉と〈嫉妬〉（七三六九） 付け届け、泣き落とし（七四〇二） 嘆願（七五二九） 〈歓待〉との接し方（七六三九） 〈わたし〉の抗議

(七七六五) もうひとつの道——〈富〉と〈貧困〉(七八四七) 〈友〉の体験(七九七五)
贈物の効能(八一五九) 黄金時代(八三二五) 嫉妬深い夫(八四二五) 結婚の不幸(八
五三一) 美の虚しさ(八八一三) 女の狡さ、貪欲(九一二五) 主従関係(九三九二) 黄
金時代(九四六三) 富と貧困——人類の墮落(九五一一) 女性との付き合い方(九六四
九)

VI

〈愛の神〉の軍勢——〈見せかけ〉の弁明——

416

〈富〉の守る道(九九八五) 〈愛の神〉再登場——叱責(二〇二七七) 〈愛〉の軍勢の結集
(二〇四〇九) ギョーム・ド・ロリス(二〇四六五) ジャン・ド・マン(二〇五三五) 攻
城計画(二〇六五一) 〈見せかけ〉の参加(二〇八八九) 〈見せかけ〉の演説——偽善と托
鉢修道会(二〇九七三) 衣服と中身(二〇九九三) 貧困と生きる糧(一一二二二) 物乞
いについて(一一二三九) 物乞いの禁止(一一三一五) 物乞いをめぐる論争(一一三九
五) 蓄財の実際(一一五〇七) 〈見せかけ〉のたくらみ(一一五四七) 『永遠の福音書』
事件(一一七六一) この世を支配するもの(一一八六七) 攻撃準備(一一九八五) 〈見せ
かけ〉〈強制禁欲〉対〈中傷〉(一二〇〇三) 〈禁欲〉の説教(一二一四九) 〈見せかけ〉の
説教(一二二四七) 〈中傷〉の告解——殺害(一二三三一)

下巻目次

XI X IX VIII VII

『薔薇物語』後篇（承前）

〈老婆〉の忠告

攻撃開始（二八九頁）

〈自然〉の告解（二〇四頁）

〈ゲニウス〉の説教

総攻撃——巡礼

解説

訳者あとがき

図版出典

書誌

索引

凡例

一、翻訳の底本はパリ国立図書館フランス語写本一五七三番、ラングロワの分類によるH写本である（解説参照）。原文は八音綴平韻の韻文であるが、逐行的な訳はまったく不可能であり、原文との対応を見るときにはかえって行数表示の混乱を招くおそれがあるので、いわゆる散文訳を行なった。

一、他の写本からの補充、行数表示は全面的にルコワ版（解説参照）に依拠した（段落末に行数を表示、また欄外に二〇行ごとの行数を表示した。ただし後者は近似的である）。

一、読者の便宜を考慮して写本原文に以下の操作を施した。

1 全体を十一の章に分け、各々にタイトルを付けた。

2 適当なまとまりごとに小見出しを付けた。

3 段落は原則として写本の飾り文字に対応させたが、写字生の明らかな間違いと見なせる場合、またあまりに長くなる場合はあらたな区切りを設けた。その場合は段落末尾の行数表示を（ ）ではなく（ 」（ ）で示した。

一、アレゴリックな意味を担う登場人物は抽象的観念の擬人化、神話の形象、生身の人間と多岐にわたるが、すべてへゝを付けて表記した。登場人物ではない（したがって擬人化されない）抽象的観念も、物語の中でアレゴリックな意味を付与されている場合は同じように扱った。

一、「」は強調ないし直接話法の引用文を示す。また引用文中の引用文も、長文の中の場合が多いので、原則として「」で示し、例外的なケースを別にすると『』は用いなかった。「」は作品名を示す。

一、本文中の（ ）は訳者による註記を示す。

一、ギリシア語、ラテン語の人名・地名・神話の形象の表記においては、母音の長短を区別しなかった。

一、訳註は章ごとに通し番号を付け、原則として見開きごとに挙げた。本文中の訳註番号は、原則として対応する語句・記述の最後に付けたが、範囲が広く、その中に次の訳註が出てくる場合は番号が前後するので、該当箇所始めに置いた。またすべての訳註に目安として原文の行番号を付けた。

一、本文中、訳註あとの挿画は一五世紀のジャン・デュ・プレ版（巻末に付した書誌参照）の木版画である。ただしこの版の挿画掲載位置は必ずしも本文の記述と一致せず、また無意味な重複も見られるなど、杜撰なところが見受けられる。本文との対応に関しては、マルトール版（書誌参照）が全挿画を第五巻巻末に引用文ないし説明と共に掲載しているので、これを参考にした。

訳註註記

一、訳註は章ごとに通し番号を付けた。本文中の註番号の表示位置については凡例を参照のこと。

一、固有名詞および単語についての註は、原則として最初に訳語を示し、必要に応じて原語（写本ないしルコワ版の綴り）と現代フランス語の綴り、あるいはそのどちらかを添えた。

一、ギリシア語、ラテン語の母音の長短は原則として区別していない。

一、聖書の引用は新共同訳を用いた。

一、頻繁に言及した近代版、近代語訳については以下の略号を用いた。語彙集あるいは註釈への言及の場合はもちろん、本文、訳文を参照した場合も該当箇所の検索はきわめて容易であるから、頁数は示さなかった。

省略表記一覧

La : Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, publié d'après les manuscrits, par Ernest LANGLOIS,

coll. S. A. T. F., 1914-1924.

Le : Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, par Félix LECOY, coll. CFMA, 1965-1970.

AL : Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, traduit par André LANLY, coll. CFMA, Traduction, 1971-1976.

AS : Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, édité et traduit par Armand STRUBEL, coll. "Lettres Gothiques", 1992.

CD : *The Romance of the Rose* by Guillaume de Lorris and Jean de Meun, traduction en anglais par Charles DAHLBERG, 1971 (rpt. 1986).

『菫薇物語』 前篇（一～四〇二八行）

『薔薇物語』、ここに始まる。

I 〈悦楽〉の園

夢と現実——わたしの夢

夢で見るのは絵空事や嘘偽りばかりと言う人がある。^{*}けれども偽りどころか、あとになって真実とわかる、そんな夢を見ることがある。証人として、わたしは作家マクロビウス^{*N}を例に引こう。夢をあやかしとはせず、スキピオ王の見た夢のことを語った人物だ。夢が実現するなど信じるのは愚かで途方もないことだと考えたり言ったりする者は、そうしなければわたしを狂人だと思うがいい。けれどもわたしとしては、夢は人々に吉凶を告げ知らせるものだ²⁰と確信している。少なからぬ者が夜、それとわからぬかたちで多くの事どもを夢に見て、のちにその意味を明確に悟るからだ。(二二〇行)

この世に生をうけて二十年目、〈愛の神〉が若者から通行料を取り立てる年齢のこ

ろ、ある晩わたしはいつものように床につき、深い眠りに入っていた。そして夢を見た。とても美しく、わたしの気に入る夢だった。そこに出てきたものは、あとになってすべて夢のとおりになつてそのまま実現したのだった。(二一〜三〇行)

* 1 一〜二「…と言う人が多い」*Maintes genz dient...* とする写本も少なからず存在する。夢の虚しさについての言説として、ラングロワはたとえば「伝道の書」V・6 (版によつては7、新共同訳では「コヘレトの言葉」)の「夢や空想が多いと饒舌になる」、アルビウス・ティブルス『悲歌』III・IV・七行の「夢は惑いの夜に訪れて、人々を易々と弄ぶ」(*Tibulle et les Auteurs du Corpus Tibullianum, Élégies, texte établi et traduit par Max Pouchont, Les Belles Lettres, 1968, p. 142*)、ラウル・ド・ウダンの『地獄の夢』冒頭の「夢には絵空事しかないが、時として現実のものになることがある」などを挙げる。

* 2 七〜一〇 マクロビウス (*Ambrosius Theodosius Macrobius*) 紀元四世紀末から五世紀初頭にかけてのローマの著作家。『サトゥルヌス祭』*Saturnalia* と『キケロ作「スキピオの夢」註解』*Commentarius ex Cicerone in Somnium Scipionis* の著者。中世を通じて広く読まれ、クレチヤン・ド・トロワの『エレックとエニード』にも「マクロビウスを証人に立てることができる」(*Erec et Enide, publié par Mario Roques, coll. CFMA, 1977, v. 6676, p. 203*) という表現が見られる (ただしここでは夢の真偽ではなく、作者に書き方を教えてくれた手本としてその名が挙がっている)。

スキピオは前一四六年にカルタゴを滅ぼしたローマの將軍 (小スキピオ)。当然、王ではなく、これをギヨーム・ド・ロリスの古典古代に関する知識の不足と見る評者もある。キケロの『スキピオの夢』は『国家論』VIにあるが、散逸して、前記『註解』によつて伝えられた。マクロビウスによれば、夢は *somnium, visio, oraculum, insomnium, visum* の五種に分類されるが、後二者については信を置くことができないという。

そこでいま、わたしはこの夢を歌い上げて語り、あなた方の心になおいつそうの歡びを与えたいと思う。〈愛の神〉がそのように願ひ、かつ命じているのだ。だからもし誰かにわたしの取りかかる物語の名を尋ねられたら、『薔薇物語』と答えよう。そこには「愛の技法」^{*3}がすっかり収められている。素材は優れ、かつ新しい。わたしはある女性のためにこの物語を企てた。⁴⁰神の御心にかない、その人が物語を嘉納してくださればよいのだが。多くの美質に恵まれ、まことに愛されるのに値する人なのだから、「薔薇」と呼ばれるのにふさわしい女性なのだ。(三一～四四行)

五月の朝

季節は五月^{*4}のように思われた。もう五年以上も前のことだが、季節は五月、そんな

*3 三八 「愛の技法」のモデルとしてまず挙げるべきはオウィディウスの『愛の技法』*Ars amatoria*であり、この作品は二〇四九行以降の「〈愛の神〉の教え」の直接的な典拠でもあるが、作品全体への影響という点に関して、ポール・ドマは「『愛の技法』の」影響は軽微であり、(…)『薔薇物語』はむしろ『変身物語』により多くを借りている」と述べる (Paul Demats, *Histoire de la littérature française*, coll. U, p. 74)。一方ジャン・ド・マンの作品中の「〈友〉の忠告」(特に七二七七～七七六四行)には『愛の技法』からの借用が多数見られる。

*4 四〇～四四 「意中の婦人が作品を嘉納することを願う」というモチーフは中世の物語の作者の独白ないし読者への語りかけにおいてしばしば見られる。Laは『クローシー城主とファイエル奥方の物

語』の次の一節を引く。「〈愛〉よ、どうかあの方がこれを嘉納してくださるように配慮してほしい。わたしの心はかくも彼女を愛し、崇め、それだからこそわたしはこの作品を書こうと企てたのだ」(五一〜五四行)。

形式上、一種の献辞と見られるこの一節から、薔薇(の蕾) Ⅱ作者ギヨームの意中の女性の象徴的表現という解釈を一義的に採用し、したがって物語全体を作者の個人的な体験とする読み方もあるが、「隠された意味」の解釈としては一面的に過ぎる。この翻訳および註解においては、アレゴリー解釈に関して、叙述の多義性(意味の多層構造)は一对一の線的なものではなく、「隠された意味」のレヴェルの数は常に不定で変化するという立場を堅持する。

* 5 四五〜八三 〈五月の朝〉とも名付けられるトポス。中世の抒情詩の多くは、新緑、咲き乱れる花々、小鳥の囀り、せせらぎないしは泉といった舞台装置を列举して始まり、四月ないし五月に時期が設定される(Cf. P.-Y. BADEL, *Introduction à la vie littéraire du moyen âge*, 1969, p. 152, バデル、原野昇訳『フランス中世の文学生活』白水社、一九九三、一九一〜九二頁)。ギヨームの作品もその例にもれず、五月のある朝にすべてが始まることになる。ここには「春」(printemps、古形では printemps)という言葉は見られないが、そもそも「春」の原義は「(夏の)最初の時」(le premier temps [d'été])であり、つまり中世には事実上季節は夏と冬しか存在しなかったことに注意しておきたい。Cf. Georges Gugenheim, *Les mots français dans l'histoire et dans la vie*, tome I, Picard, 1972, p. 55. ^aはリュトブフの『天国への道』の冒頭をギヨームの作品のこの一節に着想を得たものとしているが、そこには三月半ばを夏とする表現が見られる(ただしギヨームの影響に関して、リュトブフ全集の編者ファラルとバスタンは懐疑的である)。Cf. Rutebeuf, *Œuvres complètes de Rutebeuf*, publiées par Édmond Faral et Julia Bastin, 2 vol., Paris, Picard, 1959-1960, tome I, pp. 336-370.

なお前註に見られるような『薔薇物語』Ⅱ作者ギヨームの実体験説においては、「二十歳の時」(二一行)と「五年以上も前」(四五行)を合わせて、執筆時にギヨームは少なくとも二十五歳以上であった